

特別企画

新たな大学像を描くための周年事業

時代や社会の変化・要求に応じて、大学も自らを再定義し進化すべき時にきている。その契機となるのが周年ではないか。歴史を振り返り、評価すべき点、改善すべき点を洗い出すのに、周年という節目はいいタイミングとなる。課題を全学で共有し、それを解決するために自学が今、社会に対して担う役割、使命とは何かを考えることが重要だ。そのうえで、建学の精神、教育理念を再定義、それを周年事業を通して学内外に伝えて共有し、50年後、100年後へと続く道筋を示すような事業が、求められている。

ANNIVERSARY

導入

周年を契機に自学を検証 数年後のビジョンを見据え、計画し行動に移す

歴史を振り返る事業から 将来を見据えた事業へ

長い歴史は、大学にとって大きな財産だ。自学の礎をつくってきた人々の意思を継承し、築いてきた実績を振り返る節目として周年を捉えるのが、これまでの主流だったと言える。周年事業も、記念誌の編集や記念碑、記念棟などの建築、自学の功績を共有するための学内講演など、内向きの事業を展開する大学が多かった。

長い歴史があるからこそ、創立時と現在の社会状況の違いは大きく、時代の変化に合わせた建学の精神や教育理念の再定義が必要となる。再定義し、めざす姿を学内外に伝えるには、周年という節目は絶好の契機だ。再定義し

た建学の精神や教育理念を周年のコンセプトとすれば、学内を同じ方へ向かわせることができるし、UI（ユニバーシティ・アイデンティティ）を基にしたロゴ、シンボル、スクールカラーなどをつくり、それとともに学外に周年を公表することも可能だ。

学内向けの事業から一歩進めた学外に対する発信にも力を入れる周年事業に加え、近年では周年への捉え方を変える大学も増えている。

18歳人口が減る中、他大学との差別化を図り特長を鮮明に打ち出さなければ、定員割れにつながる。学生を安定的に集めるためには、自学の立ち位置や強みを客観的に把握し、将来の目標を定め、具体的な計画を策定する必要がある。そのため、10年後、50年

後に目を向け、中長期的な将来計画を策定し、経営と教学の両面を見直す節目（マイルストーン）として周年を位置付けるようになった。

そのため、以前は、実行委員会をはえぬきのベテラン教職員で構成する大学が多かったが、最近では改革に意欲のある若手教職員を推進役に起用する大学がめだつ。

客観的な数値での評価が 意識改革につながる

周年を、自学を見直すマイルストーンとして位置付けたり、大学の使命を再定義する機会としたりする場合、まずは客観的に自学を知ることが必要だ。学生、卒業生はもとより、高校

生、保護者、高校教員、企業など、学外から自学がどう見られているのか、打ち出したいイメージとの間にギャップがあるのかどうかを把握するための調査が欠かせない。どこに価値や強みを見いだしてくれているのかを理解するのだ。

調査を行うと客観的事実が数字で浮き彫りになる。社会からの評価を数値で見ることにより、それまでのやり方、考え方を変える必要性を自覚できるだろう。そして、調査結果を基に、ギャップを埋めるための具体的な行動計画を立てる。実行成果を検証したり、方向性を修正したりする際も、調査結果などの事実に基づいて行うとい

いだろう。事例として紹介する甲南女子大学は、調査結果からブランド力を向上させるような取り組みが必要だと感じたという。まずは学生の意識改革に着手。目的意識を持って学べるように、現代に合うよう再定義した教育理念と校訓の浸透に尽力した。

より具体的な表現に変えたことによって、学生にとっては在学中の学び、身に付けるべきことが、教員にとっては教えるべきことが具体的にになり、大学の特長が明確になったという。この改革を進める契機として周年を活用し、全学的な取り組みがスムーズになった好例と言える。

着手すべきは学内の コミュニケーション強化

周年を契機に大学改革を行う場合、部署や学部間の見えない壁を取り払い、他部署の課題も自分ごととして捉えられる風通しの良い環境が必要だろう。課題を知らないまま改革に取り組

んでも推進にかかわっている人だけの盛り上がりにとどまってしまう。これは、建学の精神の再定義においても同じことで、再定義する必要性、思いが伝わっていないと意味がない。学内に思いが浸透すれば、UIを可視化したロゴやシンボルが一人歩きすることもなく、どの部署が学外に何を発信しても主張がブレることはない。趣旨が統一された事業展開が可能になる。まずは、環境づくり（活発なインナーコミュニケーション）に取り組もう。

周年の事業プランを立てるにあたり、インナーコミュニケーションの強化に最初の1年をかけ、腰を据えて取り組もうとしているのが、事例で紹介する北里大学だ。周年事業の成功のためには、まずは学内のコミュニケーションが重要であることを示している。

UIを浸透させることによって、学内のコミュニケーション強化を図った大学もある。陣頭指揮をとった学長は「自学がこれからの100年を生きるために、周年の節目をどう活用すべきか考えること自体がまさにUIである。UIを伝え、すべての教職員に大学の存在意義を改めて考えさせる。これにより、それぞれの立場からの思考ではなく、大学として、どうあるべきかという思考に変わるだろうから、温度差を埋めることができると思う」と話す。

教育プログラムから 人材像を打ち出す

周年に合わせて学部・学科を開設する大学も多い。この場合も、自学の客観的分析と、教育理念や周年のコンセプトに基づいて教育プログラム全体を見直したうえで、開設するのが本来の

姿だろう。教育理念を具体的な教育プログラムに反映できれば、社会に対してめざすべき姿を具体的に示すことができる。

3つ目の事例に挙げた西南学院大学の学科開設がそれにあたる。西南学院大学は、新学科の開設だけでなく、他の学部・学科のカリキュラム、教育システムの見直しも進め、組織の改編や語学履修の強化などを図っている。

西南学院が100周年を迎える2016年には、10年先、20年先への道筋を示せるように、現在進行形で周年事業に取り組んでいる。

PDCA検証の マイルストーンに

厳しい学生募集の状況の下、大学改革の必要性が叫ばれる時代には、危機感を共有し、学内を一つにするきっかけが必要ではないか。その契機が周年だろう。「周年という名目を使えば、生まれ変わろうという気持ちを盛り上げ、重い腰が軽くなる」と話す周年事業担当者もいる。機会をうまく活用し、大学改革に丸となって取り組むべきだ。

そして、次の50年、100年後のあるべき大学像を掲げ、それに向かう際のマイルストーンとして周年を位置付ける。その時代、時代の社会の要請をくみ取り、大学は何ができるのかという発想の下、自学を見直す契機とするのだ。

自学の特長や強みに磨きをかけ、新たな大学像を打ち出すための実行プランを策定し、それを学内外に対してわかりやすく表現する。こうした取り組みが、現代に求められる周年事業ではないか。